

日本医史学雑誌 第四十二卷第四号 目次

原 著

講御堂寺過去帳による藍屋家の系譜的研究	松木 明知	四二五
解剖学書としてのヴェサリウスの『ファブリカ』と『エピトメー』	坂井 建雄	四三三
吉益東洞の天命説について—中国古代医学思想との連関から—	館野 正美	四四九
ロブリー・ダングリソンの『医学事典』—明治初年のわが国英米医学への貢献—	深瀬 泰旦	四七九
研究ノート		
医学教育制度の変革・漢方から洋学へ 浅井国幹と長与専齋の相剋を中心にして	長与 健夫	五〇三

資 料

第十二回日本医学会第一分科(医史学)講演記録		五一九
小島宝素著・森立之写『河清寓記』—書名・人名事項索引—	町 泉寿郎	五三五

追 悼

徳島県人になりきった福島義一先生	長門谷洋治	五四六
------------------	-------	-----

記 事

消 息		
中天游頭彰行事	長門谷洋治	五四八
例会抄録		
ドイツ・ロマン主義医学とその遺産	小原 正明	五六一
中国で失われ日本に現存する中国医書—内閣文庫所蔵本の分析—	真柳 誠・王 鉄策	五六一

〈本号の表紙絵〉

ポリオフサルモスコープ

1850年ヘルムホルツが発明した検眼鏡は10年後ボードインによって日本の医師たちに伝えられた。当時欧州ではすでに200種類以上の検眼鏡が考案、改良されていた。

検眼鏡の発達は誰もが簡単に広範囲の眼底観察が可能という効用により、固定検眼鏡から眼底カメラへと変遷を重ねた結果、より多くの新しい眼底疾患が発見されるに至った。この写真はウェグナーが初心者向け教育用に考案した、9人の医師が同一被験者の眼底を同時に側視鏡から覗く検眼鏡である。

右の写真は1878年に紹介されたワルダの練習用眼球木偶の大正期の改良型である。(奥沢 康正)

血液循環論前史(2) 藤倉 一郎 五三

アラブ医学者の名前 泉 彪之助 五五

八丈島に流された医師たち―八丈島流人銘々伝より― 中西 淳朗 五五

本間玄調について 荒井 保男 五八

『鎮将府日誌』について(その二・太政官日誌との併読) 中西 淳朗 五九

荒川保雄：虱に賭けた四〇年の生涯 佐分利保雄 六〇

ペスト残影シリーズ その八 ライン川中流域に「ペスト残影」を求めて 滝上 正 六〇

ケガレの思想の歴史的展開 杉田 暉道 六一

紹介

山田慶兒・栗山茂久編『歴史の中の病と医学』 杉立 義一 六三

杉山章子著『占領期の医療改革』 酒井 シヅ 六四

大谷藤郎著『らい予防法廃止の歴史』愛は切ち克ち 城壁崩れ陥ちぬ 橋本 和朋 六六

二宮陸雄著『種痘医北条諒斎 天然痘に挑む』 深瀬 泰旦 六七